

1 調査の目的

ドメスティック・バイオレンス（以下、「DV」という）は、配偶者など親密な関係にある者から振るわれる暴力のことである。DVとは、犯罪となる行為をも含む人権侵害であり、男女共同参画社会を形成していく上で克服すべき重要な課題である。

昨今、若年層の男女間における暴力（以下、「デートDV」という）の問題が注目されているが、その背景には、若年層においても暴力の問題が身近に存在している、と考えられる。

あらゆる暴力を許さない社会形成のためには、男女の対等なパートナーシップや、暴力を伴わない人間関係の構築が必要である。

本調査は、県内の高校生・大学生におけるデートDVについての意識や経験、暴力の考え方などの実態を把握し、今後の三重県におけるデートDV防止及びDVの未然防止に向けた取組の基礎資料とすることを目的として実施した。

2 調査設計

(1) 調査対象

高校：県立高等学校（全日制）55校（※）、私立高等学校2校（全13校中）に在籍する生徒
大学：三重県内の国公立大学・短期大学4校（全4校中）、私立大学6校（全8校中）に在籍する大学生、短期大学生

（※）全日制課程を有する全ての県立高等学校の協力を得た。

(2) 調査方法

県立高等学校（全日制）へは、県立学校長会議にて実態調査の協力を依頼した。1校につき各学年1クラスずつ合計3クラスにアンケート調査を協力要請し、回収を行った。

私立高等学校へは、三重県私学協会の理事会にて同様に協力を依頼し、協力校へアンケートを配布、回収した。

大学については、個別に協力を依頼（所属する教員への直接依頼も含む）し、協力校へアンケートを配布、回収した。

各校での調査実施の際には、プライバシーに配慮しアンケートとともに専用封筒を配布し、回収した。

(3) 調査期間

平成24年9月～12月

(4) 回収状況

(単位：件)

	アンケート配布数	アンケート回収数	回収率
高校生	6,920	6,139	88.7%
大学生	780	702	90.0%
合計	7,700	6,841	88.8%

高等学校については、県立及び私立高等学校で合計57校、大学・短期大学は国公立・私立大学（短期大学）合計10校の協力を得た。

<参考> 平成24年5月1日現在

県内の高等学校の生徒数（全日制）

(単位：人)

	全体	男性	女性
県立	38,104	18,934	19,170
私立	10,570	5,507	5,063
合計	48,674	24,441	24,233

県内の大学・短期大学の学生数

(単位：人)

	全体	男性	女性
国公立	7,266	3,954	3,312
私立	7,809	4,148	3,661
合計	15,075	8,102	6,973

3 分析検討

本調査は三重県男女共同参画センター「フレンテみえ」の調査研究事業として実施した。

この報告書では、県内のデートDVの傾向分析や今後必要な取組等を、下記の皆様の協力を得て分析検討し、まとめた。

監修：具 ゆり（ウィメンズカウンセリング名古屋YWCA代表・フェミニストカウンセラー）

協力：水落 正明（三重大学人文学部准教授）

吉岡 俊介（シニア産業カウンセラー・キャリアコンサルタント）

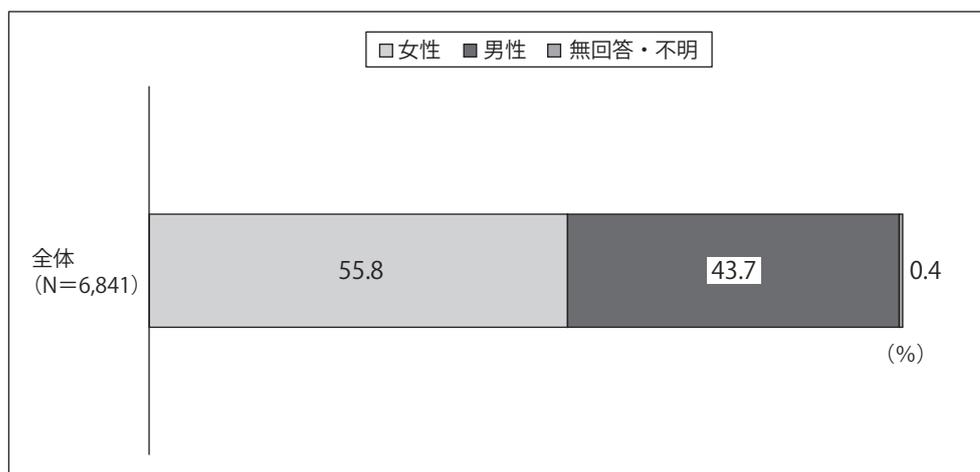
三重県教育委員会

1 回答者の属性

(1) 性別

本調査の回答者は、三重県内在学の高校生・大学生の回答数6,841件の内、女性55.8%（3,820人）、男性43.7%（2,992人）、無回答0.4%（28人）、不明1人である。

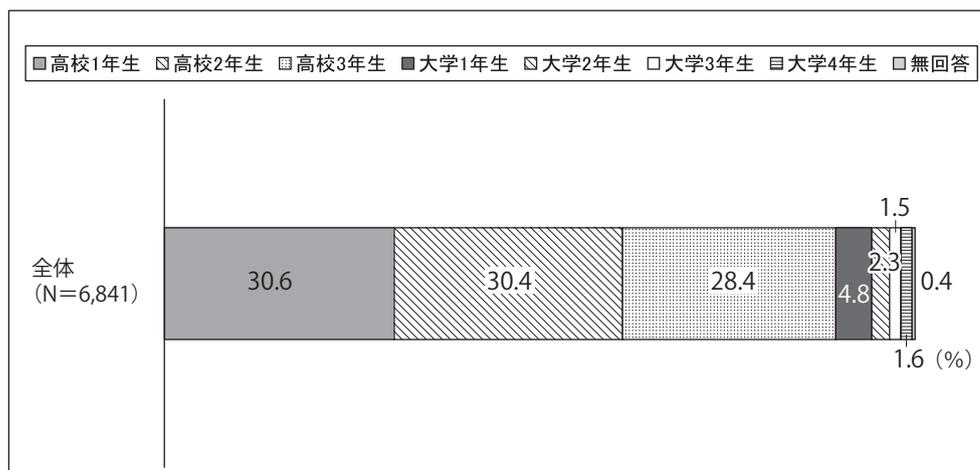
【図表1】（設問1）性別



(2) 学年

また、学年別では高校1年生30.6%（2,092人）高校2年生30.4%（2,077人）、高校3年生28.4%（1,941人）、大学1年生4.8%（329人）、大学2年生2.3%（160人）、大学3年生1.5%（106人）、大学4年生1.6%（107人）、無回答0.4%（29人）である。

【図表2】（設問2）学年



（注1）図表中「N＝」で示した数値は有効回答数を表す。

（注2）いずれの属性にも無回答があったため、資料中の図表について属性ごとの有効回答数の合計と全体の有効回答数が一致しないことがある。

2 DV、デートDVの認知度

(1) DVに関する事柄の認知度

設問3：次の事柄について知っていますか。

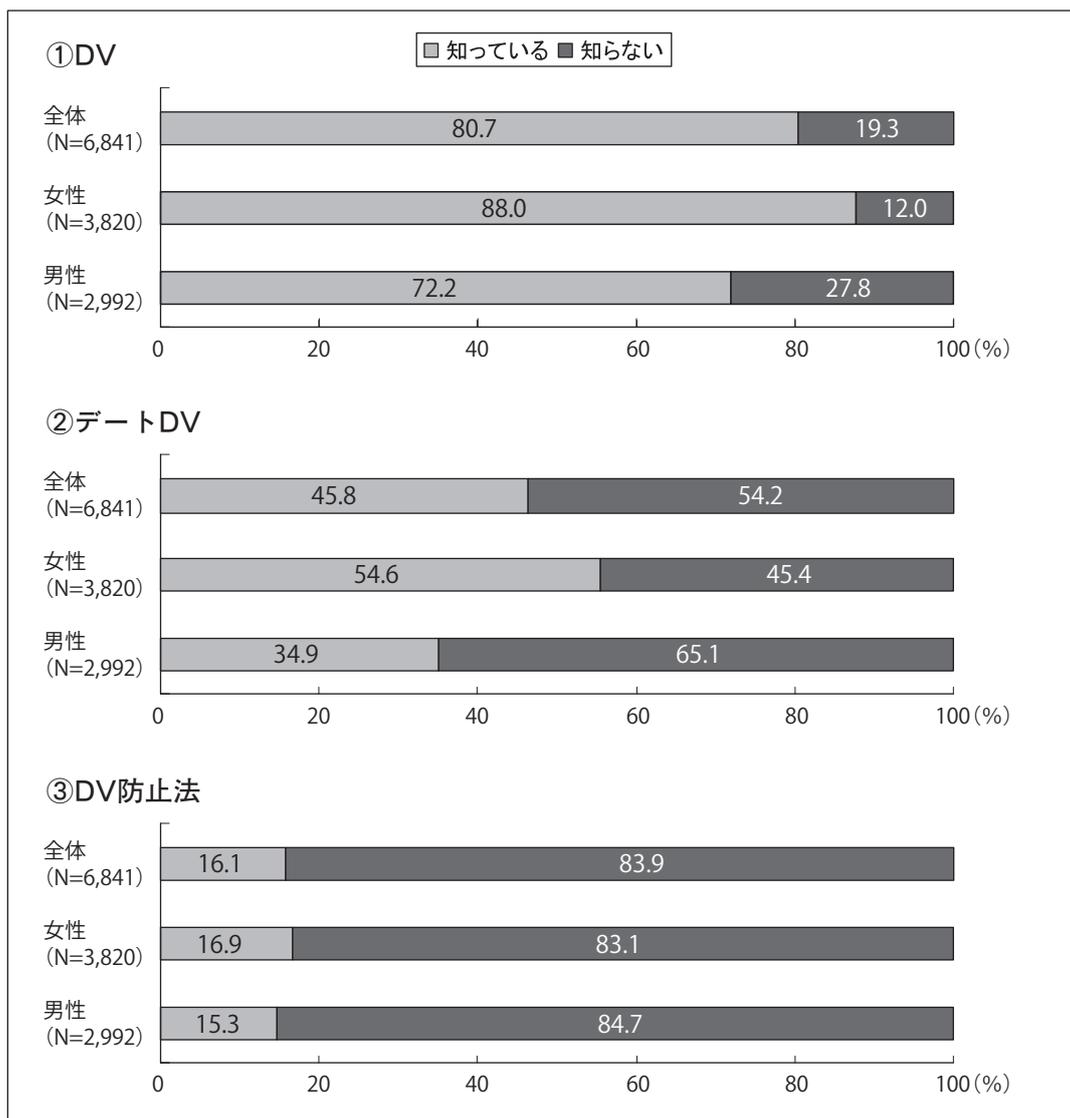
設問3では、「①DV」、「②デートDV」、「③配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律（以下、「DV防止法」という）」についての認知度をたずねた。

DVについては、全体の80.7%が「知っている」と回答している。しかし、デートDVの認知度は45.8%とDVの認知度の約半分であり、認知が十分でない状況である。

また、DV防止法については、80%を超える人が「知らない」と回答しており、法律についても認知度が低い。

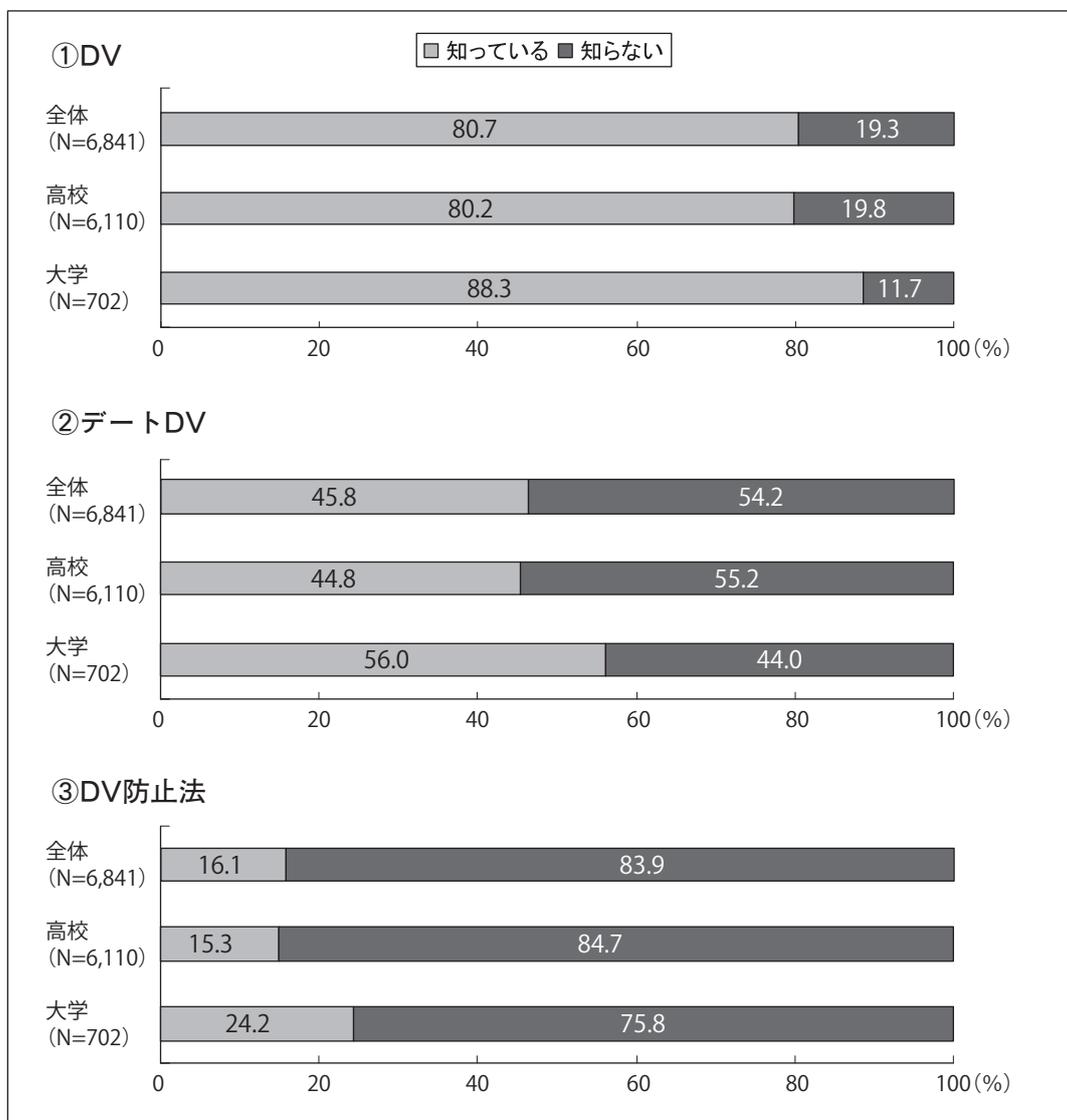
男女別に見てみると、特にデートDVに関する認知度は男女差が大きく、「知っている」と回答した割合が女性54.6%に対し、男性34.9%と約20ポイントの差がある。

【図表3】（設問3）DVに関する事柄の認知度（男女別）



高校・大学別に見てみると、全項目において大学生の方が認知度が高い。

【図表 4】（設問 3）DVに関する事柄の認知度（高校・大学別）



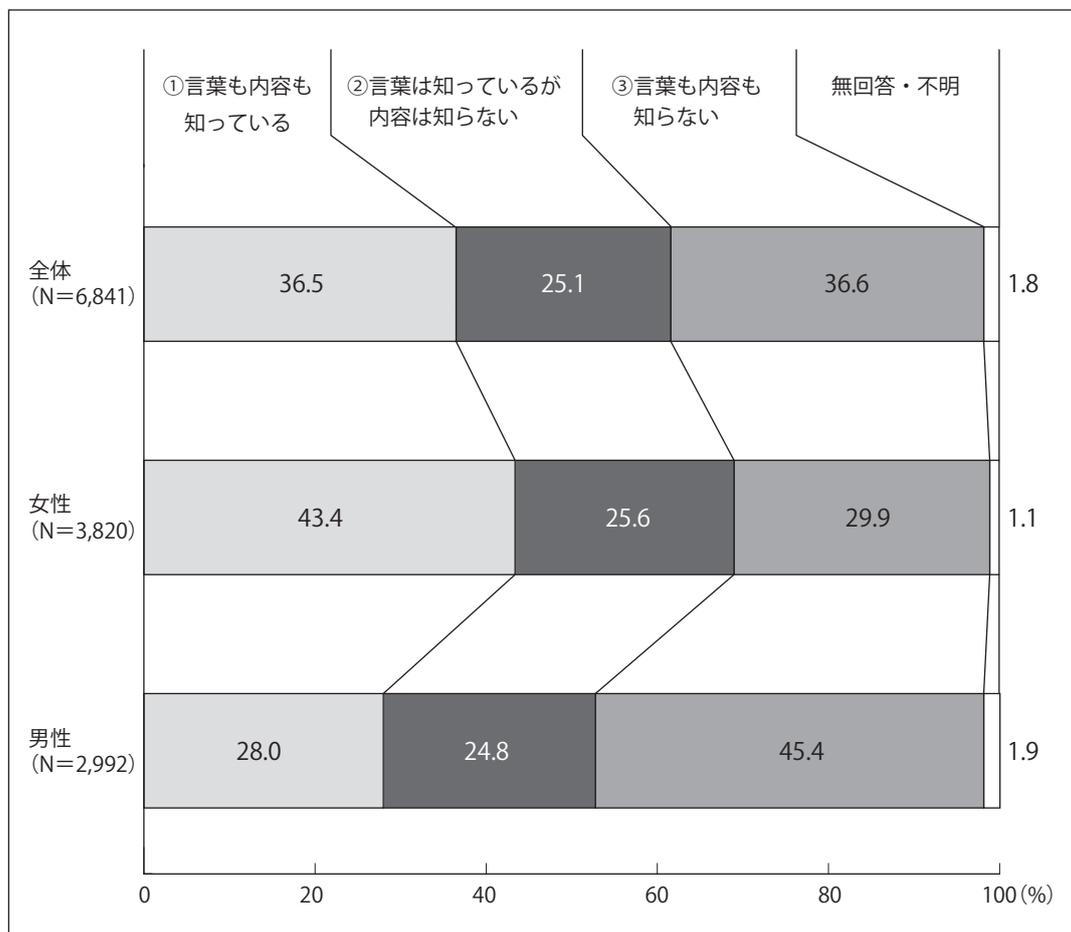
(2) デートDVの認知度

設問4：「デートDV」について、どの程度知っていますか。

全体では、「①言葉も内容も知っている」と回答した割合は36.5%であった。「②言葉は知っているが内容は知らない」と「③言葉も内容も知らない」を合わせると61.7%となり、内容まで知っている人の割合は低く、デートDVを理解するための学習が必要だと言える。

男女別で見ると、女性は「①言葉も内容も知っている」（43.4%）の割合が最も高く、男性は「③言葉も内容も知らない」（45.4%）の割合が最も高い結果となり、女性の方がデートDVに関する認知度が高いことがわかる。

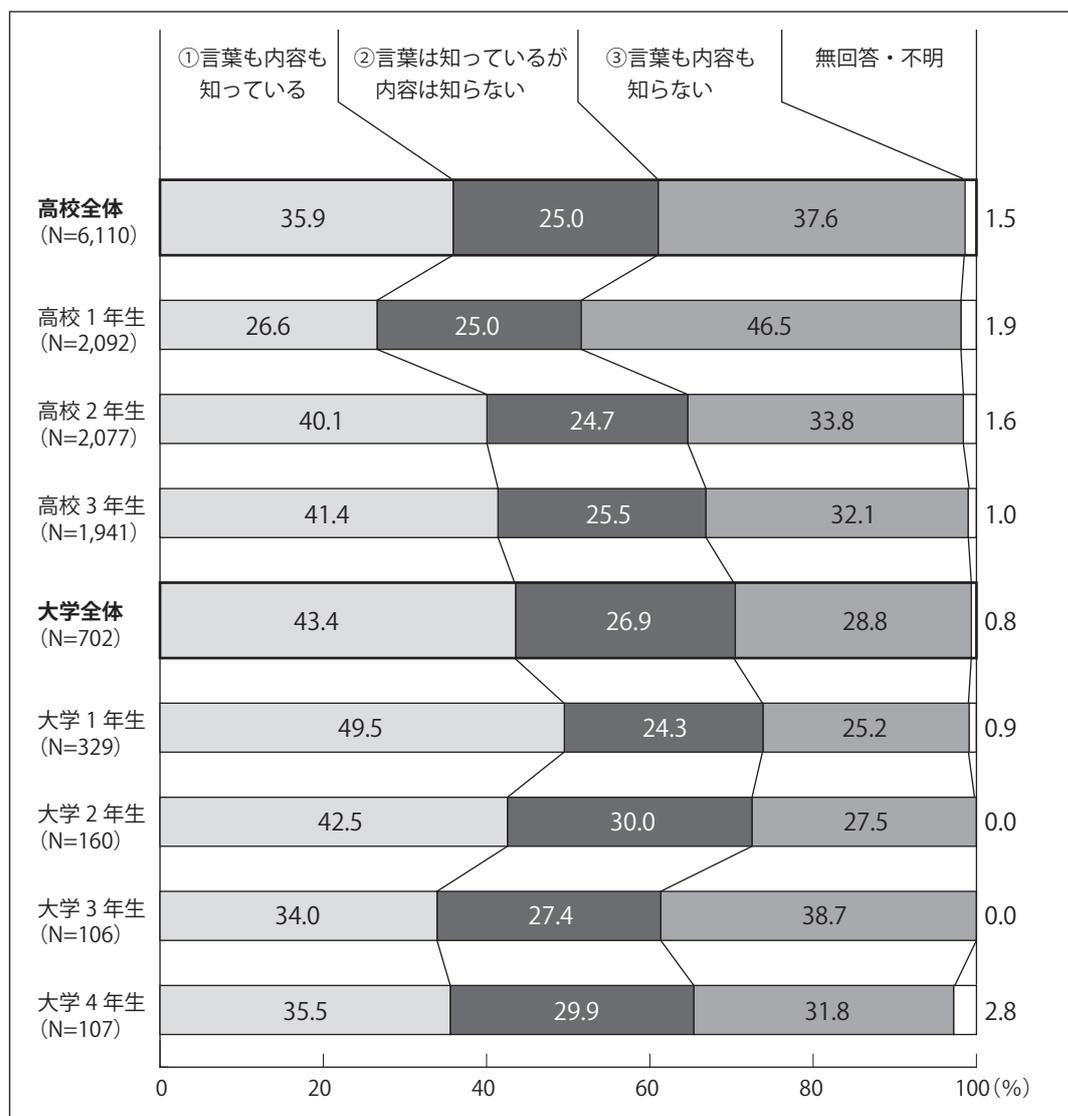
【図表5】（設問4）デートDVの認知度（男女別）



高校・大学別にみると、「①言葉も内容も知っている」と回答した割合は、高校35.9%、大学43.4%と高校の方が認知度が低い。

学年別にみると、高校1年生（26.6%）の認知度が最も低い結果となった。

【図表 6】（設問 4）デートDVの認知度（高校・大学別）



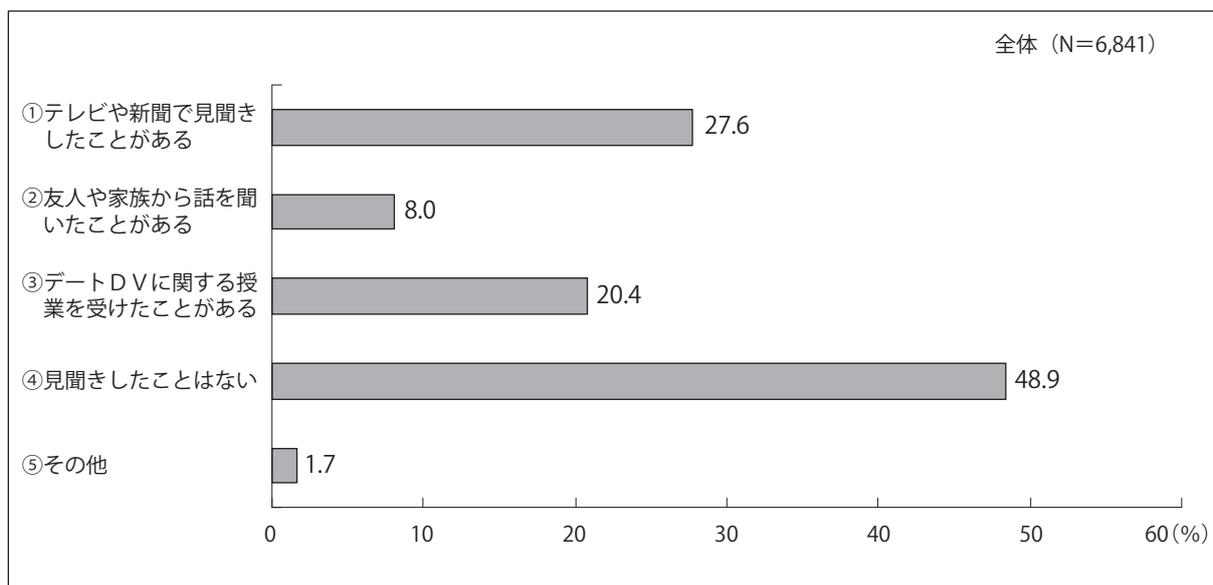
(3) デートDVを見聞きした経験

設問5：「デートDV」について、見たり聞いたりしたことがありますか。(複数回答可)

全体の48.9%が「④見聞きしたことはない」と答えており、デートDVに対する見聞経験が半数以下である。

見聞経験があると回答した人の割合は、「①テレビや新聞で見聞きしたことがある」(27.6%)が最も高い。次に「③デートDVに関する授業を受けたことがある」(20.4%)という結果となった。

【図表7】(設問5) デートDVを見聞きした経験



3 固定的性別役割分担意識

設問16：あなたの考えに近いものにマークしてください。

（「男は外で働き、女は家庭を守るべきである」という考え方について）

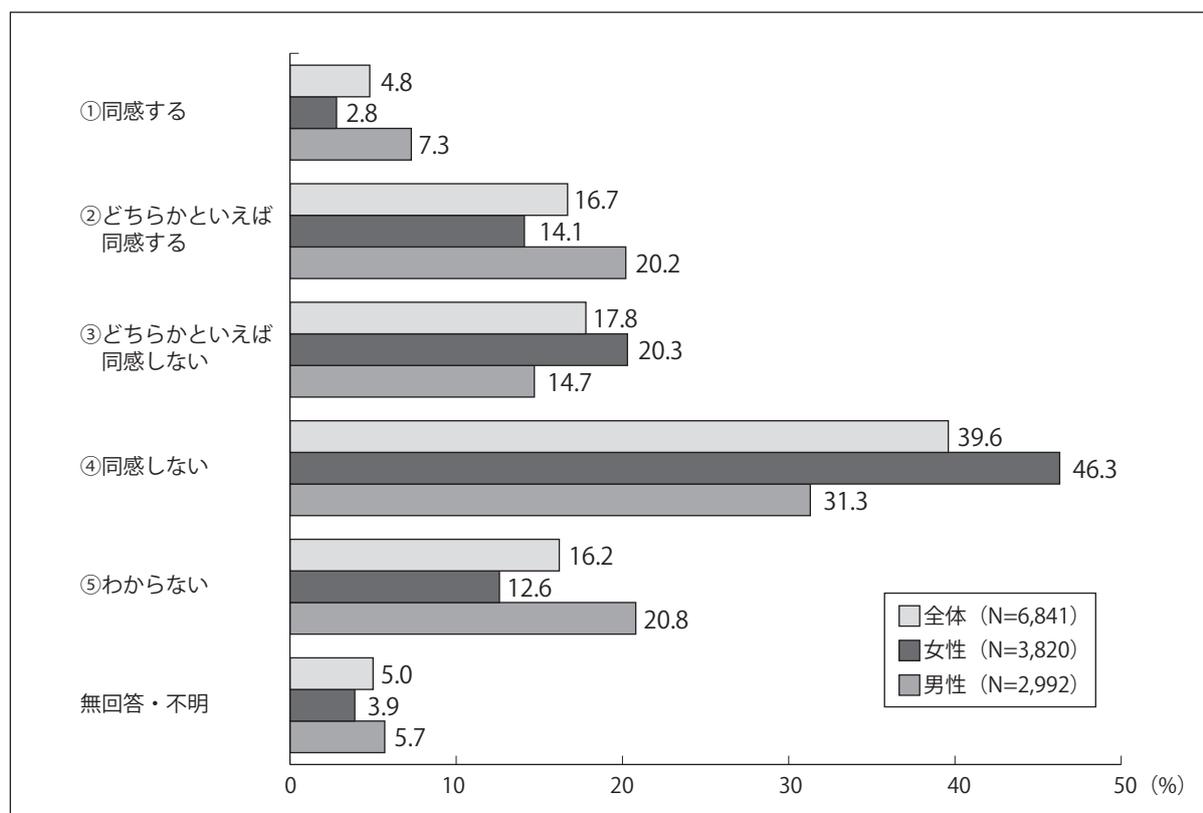
各設問項目と固定的性別役割分担意識を比較するため、ここで分析結果を記載する。

全体では、「④同感しない」(39.6%)が最も高く、「①同感する」(4.8%)は低い結果となり、高校生・大学生の中で性別役割にとらわれない意識が広がっていることがわかる。

男女別で見るとそれぞれ「④同感しない」が最も高いが、女性(46.3%)、男性(31.3%)とその差は大きい。また、「①同感する」「②どちらかといえば同感する」を合わせると女性(16.9%)に対し、男性(27.5%)の方が高く、男性は女性に比べて性別役割分担意識にとらわれていると言える。

また、「⑤わからない」と回答した割合は女性(12.6%)に比べて男性(20.8%)の方が高い。男性は女性に比べ、性別役割分担意識にとらわれる傾向があるものの、現実には、社会の変化の中で「男は仕事、女は家庭」というライフスタイルも描けず、自分の中で判断しかねている様子も背景として考えられるのではないだろうか。

【図表 8】(設問16) 固定的性別役割分担意識 (男女別)

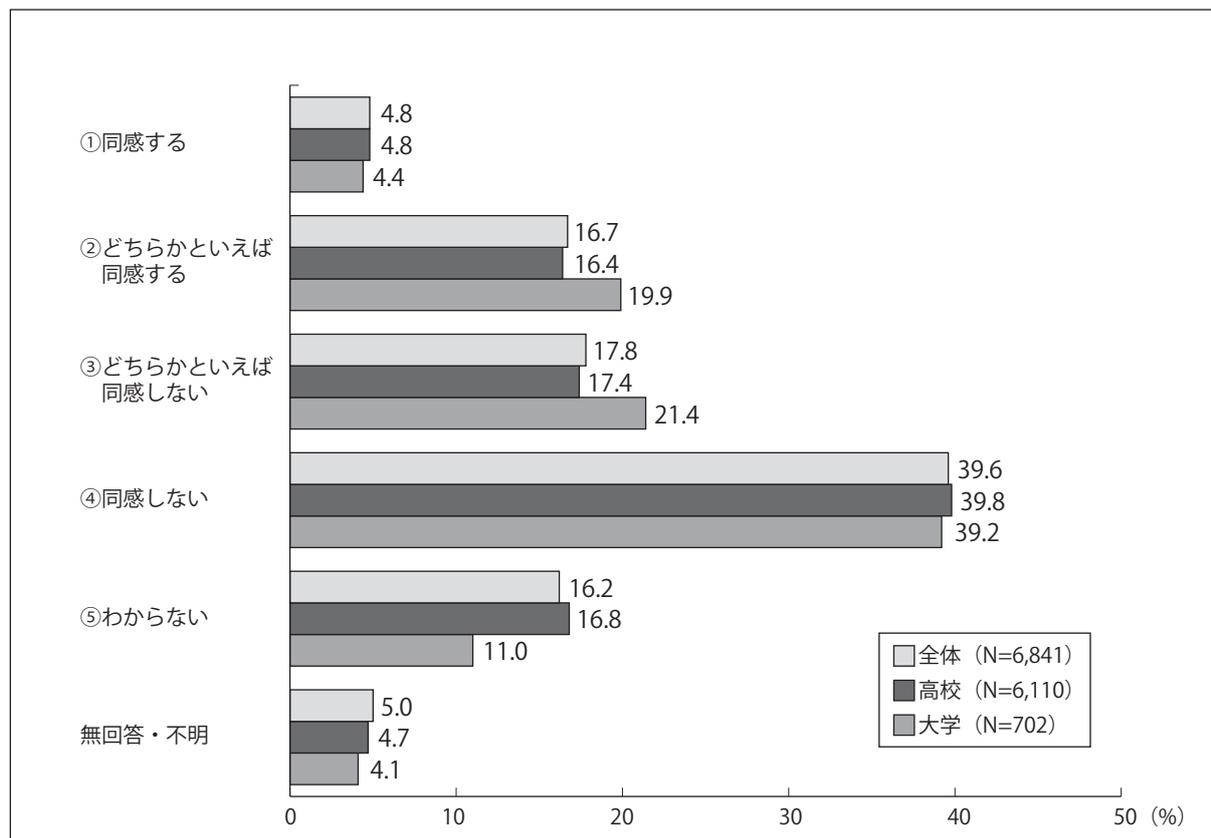


高校・大学別で見ると、高校・大学ともに「④同感しない」の割合が約4割と最も高い。また、「①同感する」「②どちらかといえば同感する」を合わせると、高校生（21.2%）、大学生（24.3%）と大学生の方が3.1ポイント高い。また、「②どちらかといえば同感する」「③どちらかといえば同感しない」の項目については、大学生の方が高校生よりも割合が高く、性別役割に関して、大学生の方が揺れ動く気持ちを持っていると考えられる。

高校生と大学生と割合の差が大きい項目は、「⑤わからない」（高校生16.8%、大学生11.0%）である。

（注）固定的性別役割分担意識：男女を問わず個人の能力等によって役割の分担を決めることが適当であるにもかかわらず、男性・女性という性別を理由として、役割を固定的に分けることを言う。「男は仕事・女は家庭」、「男性は主要な業務・女性は補助的業務」等は固定的な考え方により、男性・女性の役割を決めている例である。

【図表 9】（設問16）固定的性別役割分担意識（高校・大学別）



4 暴力の感度・許容度

(1) 暴力の感度

設問6：次のそれぞれの行動について、あなたの感じ方に合うものにマークしてください。

デートDVにも、DVと同じように身体的暴力、精神的暴力、性的暴力、経済的暴力、社会的暴力がある。ここでは、DVとなる行為を暴力としてどれだけ認識しているかをみた。

全体では、「①殴ったり、けったりすること」という身体的暴力については86.9%が暴力だと認識している。次に割合が高いのは「⑦言うとおりにしないとただではすまないとおどすこと」で63.8%である。一方、「暴力とは感じない」と回答した割合が最も高いのは「⑥借りたお金を返さないこと」(17.6%)で、次に「⑧メールや着信をチェックすること」(16.6%)である。

男女別にみると、「⑨不愉快な性的言動をすること」は男女差が最も大きく、女性の方が12ポイント高く暴力と感じている。ここから、女性の方が性的言動を敏感に感じ取り、不愉快な思いをしていることがわかる。性に関する男女の意識の差から、女性への性暴力被害につながる危険性が懸念される。

また、「③バカにした呼び方をすること」については、暴力と感じると回答した割合は男性の方が約5ポイント高く、「男性は女性より優位である」といった「男らしさ」という固定観念に基づく意識から、軽く扱われることへの抵抗感があると考えられる。

設問6「暴力の感度」と設問16「固定的性別役割分担意識」をみた。【図表11】

ここでは、性別役割分担意識について「同感する」「どちらかといえば同感する」「どちらかといえば同感しない」「同感しない」「わからない」「無回答」と回答した集団に分け、それぞれの暴力の感度を点数化して比べた。

ここから、性別役割分担意識にとらわれていない（「同感しない」「どちらかといえば同感しない」）集団は、暴力の感度が高い傾向にあることがわかる。

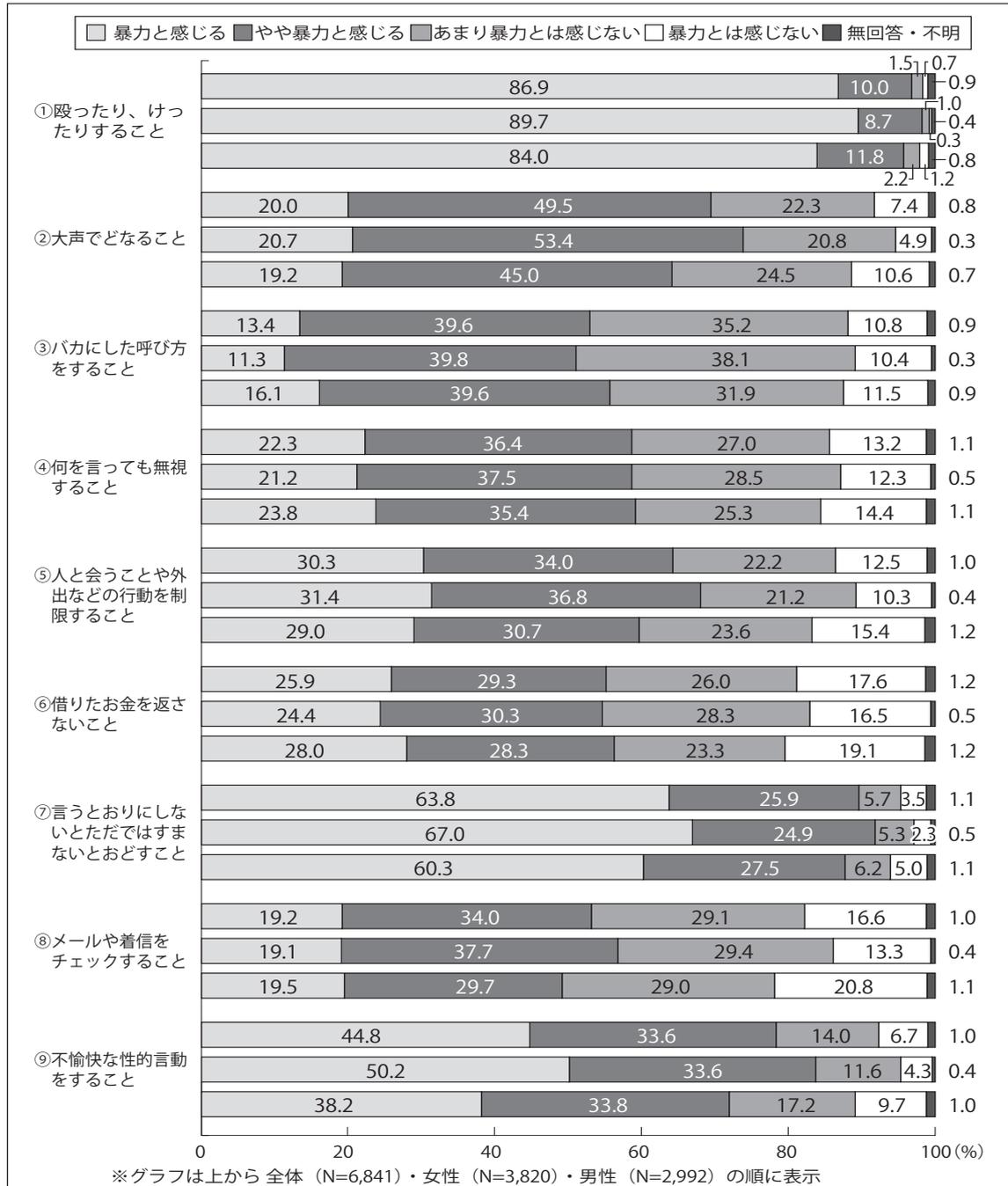
これは、性別役割分担意識を解消することで暴力の感度が高まり、デートDV予防につながることを示すと考えられる。

<暴力の感度の平均点>

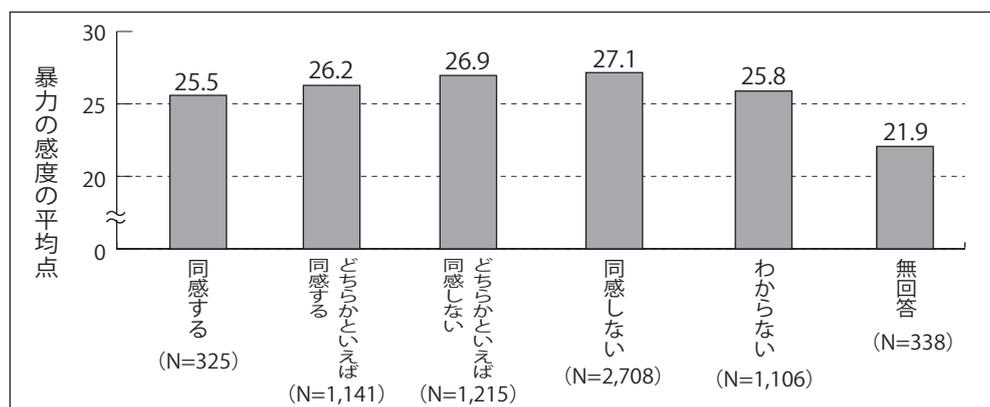
図表11では、性別役割分担意識の回答者における「暴力の感度」の平均点を縦軸としている。

ここでの「暴力の感度」は、設問6で「暴力とは感じない」を1点、「あまり暴力とは感じない」を2点、「やや暴力と感じる」を3点、「暴力を感じる」を4点とし、各回答者毎に【図表10】の9項目の合計を算出したものである。点数が高いほど感度が高いことを表す。

【図表10】（設問6）暴力の感度（男女別）



【図表11】（設問6）暴力の感度と（設問16）固定的性別役割分担意識



(2) 暴力の許容度

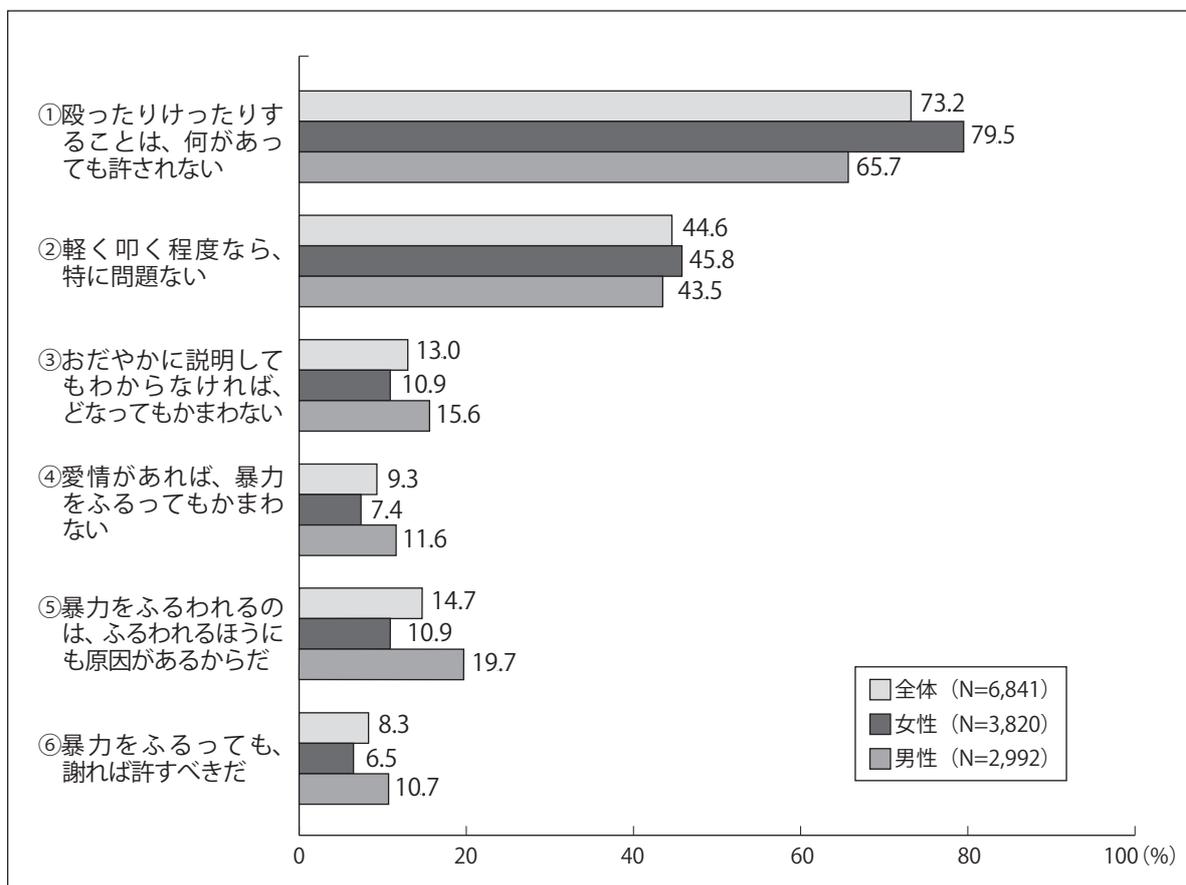
設問7：暴力について、あなたの考えに合うものにマークしてください。(複数回答可)

男女別、高校・大学別いずれにおいても「①殴ったりけったりすることは、何があっても許されない」と回答した人の割合が最も高い結果となった。

また、男女別に見てみると、「①殴ったりけったりすることは、何があっても許されない」と回答した人の割合は、女性が79.5%、男性が65.7%という結果となり、女性の方が暴力を許さない傾向にあることがわかる。

一方で、③～⑥の各項目では、女性より男性の割合が高く、男性の方が暴力を許容し、正当化する傾向や、相手にも原因があると責任転嫁する傾向が見られる。

【図表12】(設問7) 暴力の許容度 (男女別)

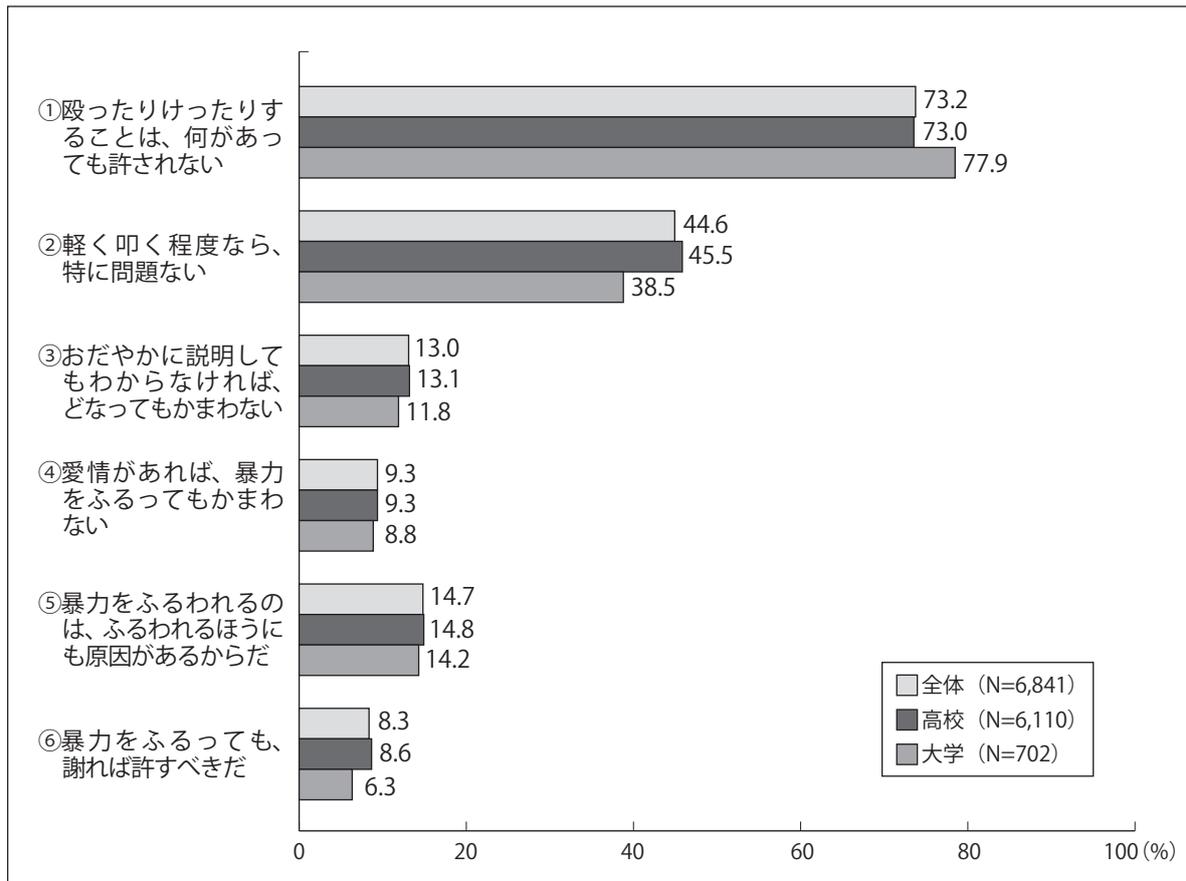


高校・大学別に見てみると、「①殴ったりけったりすることは、何があっても許されない」と回答した割合は、大学生の方が高い結果となった。

②～⑥の暴力を許容する項目に回答した人の割合は、いずれも高校生の方が高くなっている。

高校生に比べ大学生の方が暴力の許容度が低いことから、学習経験や社会経験を積む中で、暴力を許さない意識が徐々に培われていくものと考えられる。

【図表13】（設問7）暴力の許容度（高校・大学別）

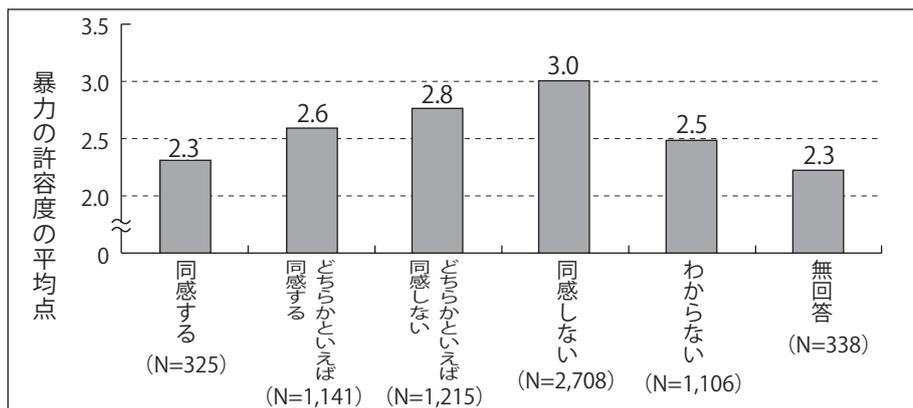


設問7「暴力の許容度」と設問16「固定的性別役割分担意識」をみた。

ここでは、固定的性別役割分担意識について「同感する」「どちらかといえば同感する」「どちらかといえば同感しない」「同感しない」「わからない」「無回答」と回答した集団に分け、それぞれの暴力の許容度を点数化して比べた。

性別役割分担意識にとらわれていない（「同感しない」「どちらかといえば同感しない」）集団は、暴力の許容度が低い（暴力を許さない）ことがわかる。この結果から、性別役割分担意識の解消が、暴力を許さない意識づくりにつながると考えられる。

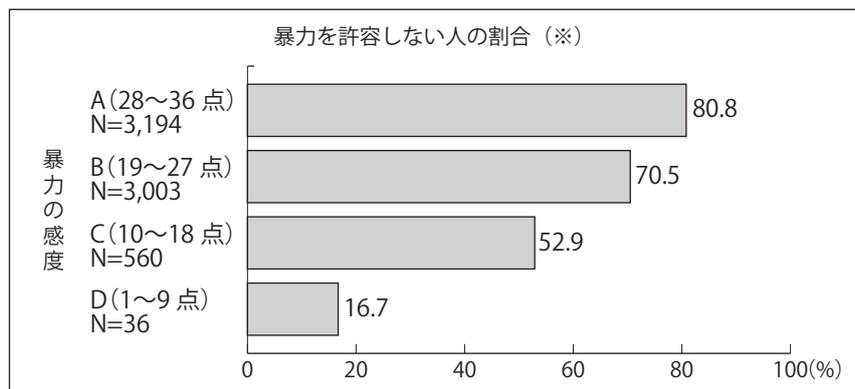
【図表14】（設問7）暴力の許容度と（設問16）固定的性別役割分担意識



<暴力の許容度の平均点>図表14では、性別役割分担意識の回答者における「暴力の許容度」の平均点を縦軸としている。ここでの「暴力の許容度」は、設問7で「殴ったりけったりすることは何があっても許されない」を5点、他項目を-1点と点数化して合計を算出したものである。最低-5点、最高5点であり、点数が高いほど暴力の許容度が低い（暴力を許さない気持ちが強い）ことを表す。

設問7「暴力の許容度」と設問6「暴力の感度」をみた。暴力の感度が高い人は、暴力に対する許容度が低い（暴力を許さない）ことが明らかとなった。

【図表15】（設問7）暴力の許容度と（設問6）暴力の感度



(※) 上記「暴力を許容しない人の割合」は設問7において「①殴ったりけったりすることは、何があっても許されない」と回答した人の割合

<暴力の感度 A・B・C・D>設問6で「暴力とは感じない」を1点、「あまり暴力とは感じない」を2点、「やや暴力と感じる」を3点、「暴力と感じる」を4点とし、各回答者毎に【図表10】の9項目の合計を算出した。最低9点、最高36点であり、点数が高いほど感度が高いことを表す。その感度の高い順にA~Dの4つの集団にわけた。なお、Dには9項目全てに回答しなかった人（1~8点）も含む。

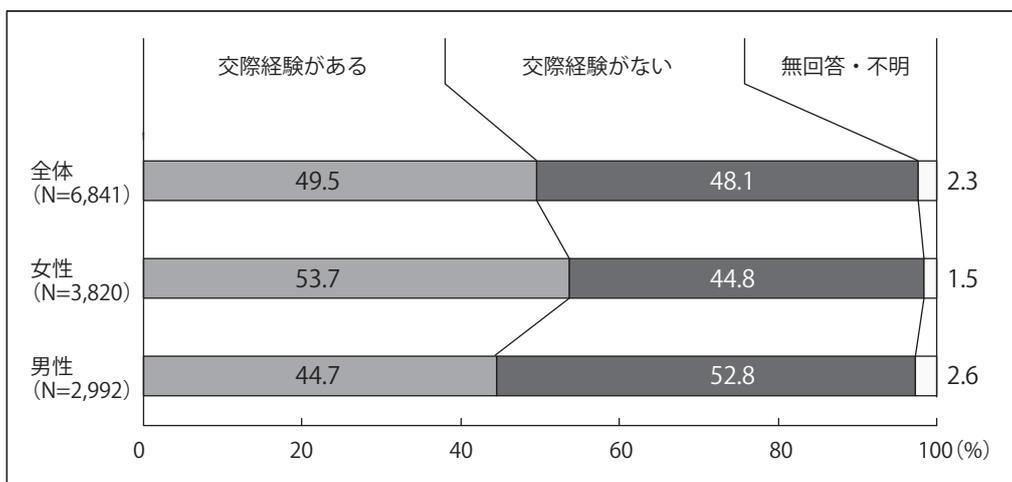
5 交際経験の有無

設問8：あなたは特定の人と付き合った経験がありますか。

全体では、「ある」と回答した人は49.5% (3,389人)、「ない」と回答した人は48.1% (3,293人)であり、男女別でみると「ある」と回答した人は女性が53.7% (2,052人)、男性が44.7% (1,336人)であった。

高校・大学別にみると「ある」と回答した人は、高校生48.4% (2,958人)、大学生61.1% (429人)である。

【図表16】（設問8）交際経験の有無（男女別）



【図表17】（設問8）交際経験の有無（高校・大学別）

